

博士論文要旨

シュンペーターの人間類型論から見たリーダーシップ論

ー GM と日産をケース・スタディにして ー

立命館大学大学院国際関係研究科
国際関係学専攻博士課程後期課程

しょうぶ まこと
菖蒲 誠

経済的にも政治的にも、また社会的にも不安定な状況と変化が繰り返されるグローバル経済の下では、時代を先取りし危機を克服するリーダーの存在が重要な意味を持つ。本論文は、ゼネラルモーターズ（GM）の破綻、並びに日産の凋落と再生をケース・スタディにして、企業の経営者に求められるリーダーシップについて、20世紀初頭を代表する経済学者の一人であるシュンペーターが初期に唱えた人間類型論の視点から論じたものである。

論文は序章と1章から3章、および終章からなり、序章ではシュンペーターの『経済発展の理論』初版（1912）と第2版（1926）との違いを紹介した上で、なぜシュンペーターの初版に基づく視点からリーダーシップ論の考察を試みたのかについて著者の問題意識を示した。シュンペーターは起業により新しい価値を創造（新結合）する企業者をリーダーと呼んだが、本論文では起業だけでなく新結合の実践によって危機に陥った大企業を再生する経営者もシュンペーターの言うリーダーとみなして、その役割を論じた。

第1章ではシュンペーターの言う新結合を怠り破綻に陥った事例としてGMを取り上げ、その原因は歴代の経営者が本業であるモノ作りの面で新結合を実践せず、収益の源泉を自動車金融の拡大に求めたことにありと指摘した。続く第2章では、GM同様に技術と組織両面の「暗黙知」を無視し、モノづくり本来の新結合を怠り、銀行からの借りに依存する形で安易な拡大路線に走った石原俊社長の経営に日産凋落の原因があったと論じた。

第3章ではルノーからの資本参加を得て日産の再建に成功したカルロス・ゴーンが発揮したリーダーの役割について論じた。ゴーンが単なるコストカッターではなく、日産の「暗黙知」を新結合することにより再建に成功したことを示した上で、成熟化した資本主義の下における大企業においてもシュンペーター的なリーダーシップが機能することを示した。また終章では、現代の資本主義経済におけるリーダーの役割を総括した。